

表1 第1回一斉テスト、追試結果

(昭和54年度)

区 分	実施日	受験者	合格者	不合格者
一斉テスト	5 / 21	474人	171人	303人
第1回追試	5 / 28	303	223	80
2	6 / 2	80	50	30
3	6 / 6	30	21	9
4	6 / 9	9	8	1
5	6 / 13	1	1	0

(注) 追試は、一斉テストと同範囲。ただし問題はその都度変えた。

表2 第1回助動詞識別習熟度調査

1回 昭和54年8月11日(土) 2回 昭和54年10月11日(木)
調査対象1学年10学級のうちA、Bの2クラス

区 分	A		B	
	1回目	2回目	1回目	2回目
35点～30点		19人	3人	13人
29～25	7人	3	2	11
24～20	6	5	6	3
19～15	10	2	7	3
14～10	7	2	2	1
9～5	2	1	1	1
4～0点				
計	32人	32人	32人	32人
平均	18.3点	28.4点	17.2点	26.9点
	52%	81%	49%	77%

問題番号	問題内容	A		B	
		1回目	2回目	1回目	2回目
1	下二動語尾	53%	91%	47%	84%
2	自発「る」	91	94	69	97
3	尊敬「す」	69	81	63	75
4	完了「り」	38	78	31	69
5	過去「き」	69	88	63	97
6	四段動語尾	41	84	41	72
7	詠嘆「けり」	78	84	84	97
8	シク形	72	97	50	84
9	シク形	69	97	57	84
10	打消推量「まじ」	38	78	31	66
26	現在推量	34%	63%	28%	53%
27	完了(存) + 推	3	56	12	31
28	断定「なり」	50	78	75	81
29	推定「なり」	19	75	28	66
30	伝聞「なり」	25	75	28	63
31	過去+助詞	9	63	6	50
32	過去「き」	69	69	12	94
33	ナ変「往ぬ」	19	63	31	56
34	完了「つ」	53	66	60	88
35	完了「ぬ」	66	59	63	91

八月から十月の二か月間で、二クラス
の平均で言うと習熟度が五〇・五パー
セントから七十八・九パーセントに
伸びていることがわかる。(ただ約一
年後の今年の十一月、この文章執筆の
参考のために、二年生になっている彼
らに同一問題を課した結果、七十三パ
ーセントのできであった。授業でも機
会をとらえてはくり返し指導してい
るのだが、文法はとかく忘れやすいとい
うこと。反復訓練の必要性を示す好例
であろう。)

次に、特に困難でまちがえやすいもの
としては次のようなものがある。
問(4)八つ渡せるによりてなむ(下二
型の「る」と混同しやすい。)問(10)劣
るまじけれ(過去詠嘆の「けり」とし
てしまう。)問(1)ありなむや(二つの
助動詞と気がつかない。)問(10)知らな
む(「なむ」の接続まで考えない。)
問(10)夜半にや君が一人越ゆらむ(係助
詞を見落とし「終止形」とする。)問
勿見せ給へらむに(現在推量)などと
している。)問(10)心もとなく覚えしか
(前に「こそ」がないのに過去の已然
形などとしている。)等々。

三 着実な伸びを見せた国語力

本校の一年次国語は五単位しかなく
同じ進学校である他校の七単位や六単
位に比べて少ない。外部模試で成績を
比較してみても一年次ではかなりの差
があり、県で四、五位にとどまってい
た。私は生徒に対して現在の努力を継
続していく限り成果は必ず出てくる、
それを信じて頑張れと事あるごとに述
べてきた。一年次の終わりから二年次
の前半にかけて成績は着実に上昇し、
今年九月末に行われた県下合同学力テ
ストでは、平均点が県下の一年生で一
位となり、成績優秀者も数多く出すこ
とができた。継続努力した生徒を高く
評価したいと思う。

おわりに

私のとった指導方法は、決して最良
のものとはいえないし、改善の余地も
多くある。また、労力的にも大変なエ
ネルギを必要とする。授業という限
られた時間を考えることにあまりマ
イナスの部分を与えることにもなりか
ねない。が、指導の根本にあるものは
情熱であることを思えば、少なくとも、
生徒の持っている学ぼうとする真剣な
心を、更に燃焼させてやるために、教
師自らも真摯な態度で教室に臨まな
ければならないと自分に言いきかせてい
る。この心構えだけは忘れることにな
ないように努めたいと思う。